

長崎港の埋立の歴史と長崎の都市形成

長崎大学工学部 ○学生員 吉田 優
長崎大学工学部 正会員 岡林隆敏

1. はじめに

平地の少ない長崎では、元亀元年(1570)ポルトガル人により港が開かれて以来、海域を埋立ることにより市域の拡大を図ってきた。特に、幕末から明治期にかけて、外国人居留地の建設¹⁾(1859~1864)、第1次港湾改良工事²⁾(1882~1893)、第2次港湾改良工事³⁾(1897~1904)までによる大規模な埋立により、現在の都市の骨格を形成するに至っている。しかし、長崎における都市形成史の研究において、明治期におけるこれらの港湾改良工事による埋立が十分に明かにされていない。本研究は、近代都市形成の基礎となる、長崎港の埋立を長崎県立図書館の保存資料¹⁾や古地図⁵⁾などから、現在の地形図に復元し、埋立の経緯と都市形成の歴史を調べた。

2. 近世における長崎港の埋立て

江戸期を通じて、長崎は多くの埋立を行っている。その代表的なものとして、寛永11年(1634)より2年間かけて、約4,000坪の出島を築造する。その後、火災による荷物の焼失を防ぐために、元禄15年(1702)約3,500坪の新地蔵を築造する。また、浦上川の川口に、享保15年(1730)に浦上新田の埋立を行っている。

3. 外国人居留地の建設

江戸幕府はアメリカをはじめ5ヶ国と修好通商条約を締結し、長崎では他都市と共に、安政6年(1859)に開港する。このために、3次に渡る埋立工事により外国人居留地の建設が始まる。まず、安政6年からの第1次造成工事では大浦海面、小曾根地区の約2,600坪、文久1年(1861)からの第2次造成工事では下り松(現在の松ヶ枝)海面、梅ヶ崎山手地区が約6,300坪、元治1年(1864)からの第3次造成工事では五間築足、梅ヶ崎地先で約4,900坪とそれぞれ埋立工事がなされている。以上の居留地埋立地域は図-2と図-3を比較すると図の右下に見ることができる。

4. 第1次港湾改良工事

明治維新の混乱の中、長崎では港湾に対する十分な管理がなされなかった。このため、中島川、銅座川、その他の諸河川の流出土砂が河口に堆積したため、海上交通に支障を来すようになった。明治10年代の古写真によれば、写真-2のように中島川の川口が干潟になっていることがわかる。このため、明治政府は土木

局雇工師デレーケの助言を求め、明治15年(1882)から第1次港湾改良工事を始める。この工事は砂防工事、浚渫工事、中島川変流工事の3つであり、埋立工事については中島川変流工事3,642坪、江戸町岸傍715坪、出島町新橋傍1,050坪、大波止沿岸643坪、突堤傍1,906坪の埋立がなされている。中島川変流工事では、出島~西浜町間

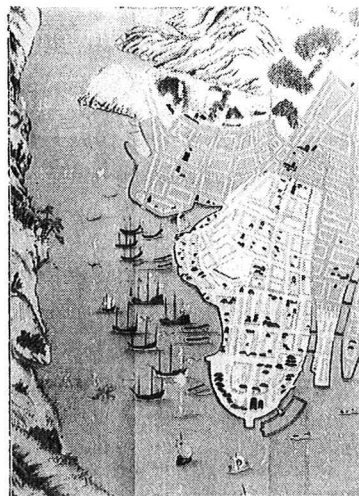


写真-1 長崎古図(寛永)

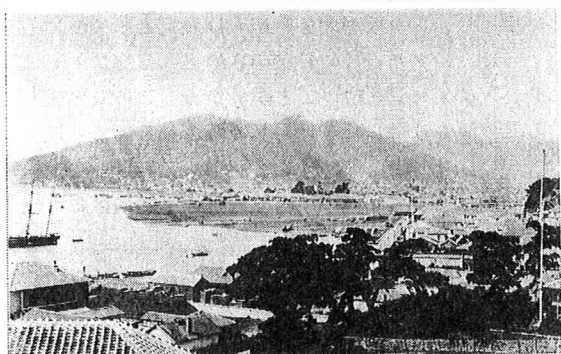


写真-2 出島前面の様子

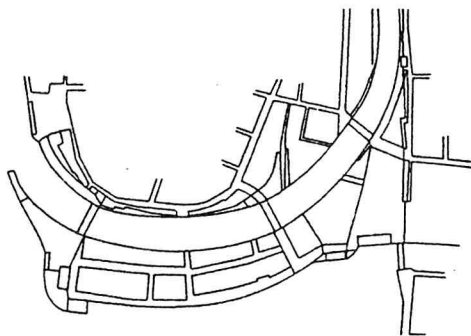


図-1 中島川変流工事

を埋立て、中島川を湾曲させ出島を陸続きとした。この変流工事と、大波止付近の埋立状況を図-1に示した。しかし、この第1次工事は浚渫工事の途中、膨大な経費の負担のため明治26年(1893)に中止となっている。

5・第2次港湾改良工事

依然として、長崎港内は諸河川からの流出土砂に悩まされ、港としての機能を失いつつあった。明治20年代後半大阪、神戸に大築港計画が起きると、長崎においても、港の改良は重要な課題となった。そこで、明治30年(1897)から港湾整備と、市域拡大を目的とした第2次港湾改良工事が着手された。この工事は、干潮時に露出する部分は埋立し市街地を造成するものである。埋立工事については、出島埋築地22,000坪、大波止付近14,000坪、大黒町裏手47,000坪、馬込沖54,000坪、中ノ島25,000坪、それに、対岸の稲佐沿岸14,500坪である。図-6は、埋立による宅地造成と、長崎駅および鉄道用の土地を示したものである。一部を九州鉄道、その他の宅地は市民に貸与された。図-5は、第2次港湾改良工事に伴う、浦上川川口の埋立を示したものである。図-4の地図と比較すると、長崎市の地域の変化が判る。

この第2次港湾改良工事により、現在の長崎市の骨格がほぼ完成したと考えることができる。

6・おわりに

本研究では、幕末より明治後期における長崎港の埋立てと、それに伴う都市の形成について、古地図および歴史的資料から考察を加えた。都市の形成を現在の地図の上に表示すると共に、埋立による都市の形成を復元した。

最近、長崎市では長崎湾を埋立てるウォーターフロント開発NUR2001が計画されている。このような新しい計画においても、都市を形成した歴史の視点から、将来の計画を見る必要がある。また、本研究では、第1次港湾改良計画における、工事の計画、デレーケの助言等も、長崎県立図書館保存資料から、明らかにすることができた。

〔参考文献〕 (1) 長崎県立図書館所蔵の古地図類 (2) 長崎県立図書館蔵：長崎港保存計画書 (3) 長崎市制50年史：長崎市役所、1939年11月 (4) 長崎外国人居留地の研究：九州大学出版会、1988年6月 (5) 出島図：中央公論美術出版、1987年3月



図-2 江戸時代の長崎



図-3 江戸幕末の長崎



図-4 明治20年代の長崎

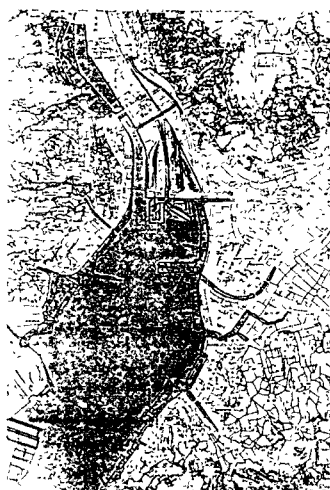


図-5 明治40年代の長崎

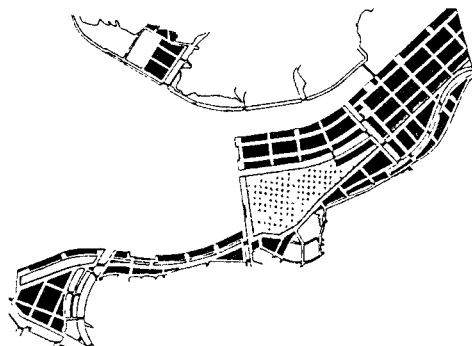


図-6 区画整理図